

「造船の町、今治」は、中国を中心とする新興国の発展にともない海上物流が拡大する中、ここ数年大きく飛躍してきた。今では、世界でも有数の造船と海運業を中核とした海事関連産業の一大集積地となっている。

1. 世界の物流を支える今治船主

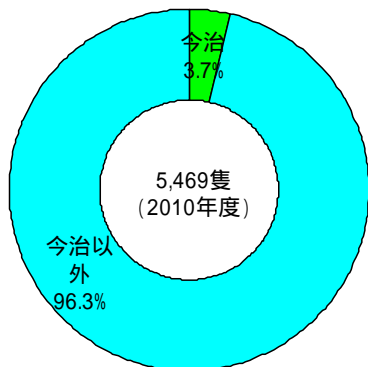
海運は、国内の貨物を輸送する内航海運業者と海外の貨物を輸送する外航海運業者とに分けられる。今治には、従来から多くの内航海運業者が集積していたが、その中の有力業者が、昭和30年代の後半から40年代の前半にかけて近海海運へ、昭和40年代後半から50年代にかけて遠洋海運へと進出することで拡大・発展してきた。

(1) 内航海運

内航海運は、石油製品、非金属鉱物、金属、セメントなどを中心に国内物流の約32%を担っている。

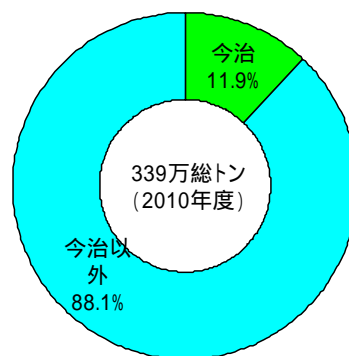
今治の内航海運業者は、内航市場の縮小や後継者難から減少の一途をたどっているが、今でも183の事業者がいる。保有または使用している船隻数は205隻で、国内の内航船隻数5,469隻の3.7%に当たる。また、船腹量は約40万総トンで国内の11.9%を占めている。

図表-1 国内内航船隻数に占める今治の割合



資料：四国運輸局

図表-2 国内内航船船腹量に占める今治の割合



資料：四国運輸局

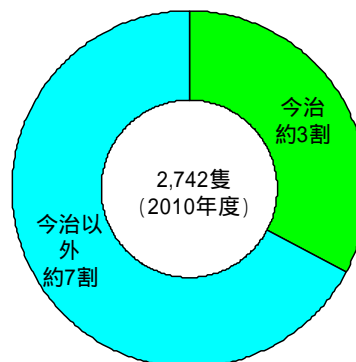
(2) 外航海運

資源の乏しい日本は、原油やガス、石炭、鉄鉱石などのエネルギーや鉱物資源を中心に輸入し、製品を輸出しているが、これらの99.7%は船で運ばれており、外航海運は日本に欠くことのできない輸送手段となっている。

今治の外航海運業者は60事業者あり、ばら積船、コンテナ船を中心に約900隻を保有している。これは日本全体の約3割を占めている。

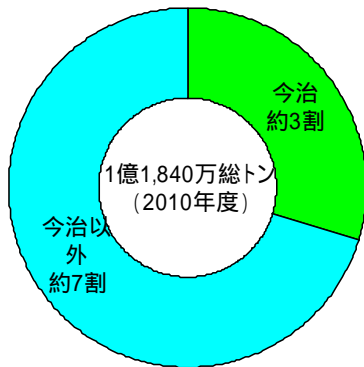
また、世界の船腹量8億8,260万総トンのうち、日本の商船隊の船腹量は1億1,840万総トンで、世界の13.4%を占めている。当社の推計では、今治船主の船腹量は約3,500万総トンで、世界の約4%、日本の約3割を占めている。

図表-3 日本の外航船隻数に占める今治の割合



資料：国土交通省海事局、今治はIRC推計

図表-4 日本の外航船船腹量に占める今治の割合

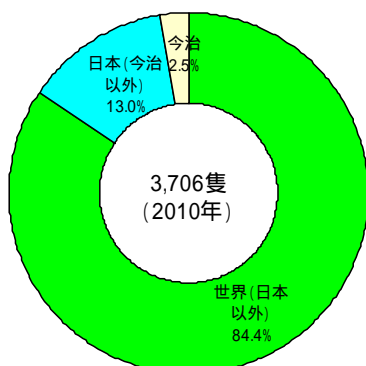


資料：国土交通省海事局、今治は IRC 推計

2.造船所

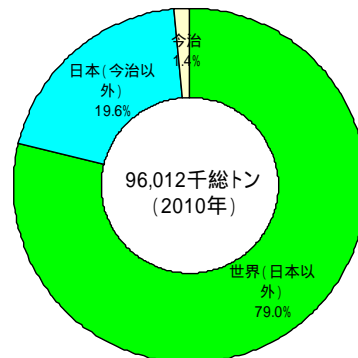
今治には、17の事業者、21の工場が集積し、2010年度には94隻、139万総トンの船が建造された。新造船竣工隻数のシェアは、世界3,706隻の2.5%、日本577隻の16.3%を占めている。また、竣工量では世界9,601万総トンの1.4%、日本2,017万総トンの6.9%を占めている。その中には、日本の造船業界を代表する今治造船グループ（建造量国内第1位、世界第4位）や新来島どっくグループ（国内第4位、世界第13位）があり、大型船から小型船まで用途に応じて多種多様な船を建造している。

図表-5 世界の新造船竣工隻数に占める今治の割合



資料：日本造船工業会、四国運輸局
注) 対象船舶は100総トン数以上、今治は2010年度の値

図表-6 世界の新造船竣工量に占める今治の割合



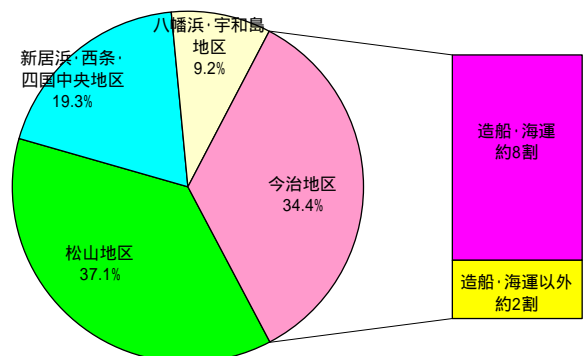
資料：日本造船工業会、四国運輸局
注) 対象船舶は100総トン数以上、今治は2010年度の値

3.金融機関

海運業者が保有する船の価格は数十億円と高額であるため、それを資金面で支える金融機関の役割も大きくなっている。

2011年3月末時点における愛媛県内主要金融機関の総貸出金残高5兆3,345億円のうち、今治の割合は34.4%（約1.8兆円）となっている。これは、松山地区と同程度、新居浜・西条・四国中央地区の1.8倍の規模となっている。また、今治地区の総貸出金のうち、造船・海運向け貸出金は約8割を占めるとみられる。

図表-8 県内総貸出金に占める今治の割合



資料：日本銀行松山支店
注) 県内総貸出金残高以外は IRC 推計

2010年度の国内損害保険会社の船舶保険料収入約800億円のうち、15%の約120億円が今治での収入となっている。損害保険会社にとって、今治は東京に次ぐ大きなマーケットであり、また、海事産業が集積していることから、船舶保険のスペシャリストを育成するための重要な拠点とも位置付けられている。

おわりに

今治には、海事関連産業に携わる多くのプレーヤーが存在し、世界有数の海事都市を形成している。

しかし、円高が進む中で、中国や韓国企業をはじめとする海外企業との競争が、以前にも増して激しくなっている。そのため、これまで以上に海事関連産業の集積を活かした取り組みが求められてくるのではないかと感じる。これからも、海事産業同士が協力し合って、この円高局面を乗り越え、世界有数の海事都市として維持、発展することを期待したい。

(篠原 敏夫)